研究だより vol.3

未来の京都創造研究事業は、
「大学のまち京都」の『知』の集積を、京都の未来にとってよいことに活かそうという思いから始まった事業で、
大学の研究者と京都市の担当部署との協力により、
未来の京都づくりに向けた政策を創造するための
調査・研究を行っていただいています。

今回の研究だよりでは、今年度に採択している6件の研究テーマのうち3件について、研究に携わる方々からお話を伺いましたので、紹介いたします。

指定課題

外国人留学生の大学卒業後の就業に関する動向の分析と自治体、企業及び大学における支援方策に関する研究

立命館大学 石原 一彦 教授
（担当部署　総合政策室、国際化推進室、産業政策課、中小企業振興課、大学コンソーシアム京都）

研究に携わっているみなさん

立命館大学キャリアセンターを主体として、留学生に関わる教員・部署を含めて、10名の研究会を構成しています。そこに、大学コンソーシアム京都及び京都市関係部局の方々も参画し、議論を進めています。

左からキャリアセンターの寺本憲昭さん、石原教授、渡辺由季子さん

研究の概要

立命館大学を中心とした京都の外国人留学生の日本企業への就業の希望動機、活用できる能力、将来展望などを分析するとともに、企業が留学生に求める能力、期待や留学生の離職実態等を調査し、情報・交流不足などの表面的なミスマッチ、求める能力や評価・昇進システムなどの根本的なミスマッチを考察します。

これを基に、ミスマッチを埋めるために必要な、大学等における支援方策、大学コンソーシアム京都などでの展開をイメージした留学生及び企業の能力開発プログラム、京都市による留学生就業環境整備方策等を検討することを目的としています。

ラフな懇談会の様子

研究の進ちょく状況

京都市内にキャンパスを有する11大学を対象に、留学生の就業実態と就業支援実態に関する調査を行うとともに、留学生・日本企業に就職した元留学生を対象とした就業に関するアンケート調査、京都の企業7社を対象としたヒアリング調査を行いました。

また、2月3日にキャンパスプラザ京都にて「京都企業と外国人留学生のラフな懇談会」を試行的に実施し、留学生の就職に向けた不安や、企業が留学生に期待することについて、ざっくばらんに意見交換を行い、それぞれの率直な思いをお聞きしました。

これらの結果から見えてきたことを基に、留学生の日本企業・就業文化の理解の促進及び企業側の外国人留学生の特性・価値観の理解の促進に資する方法を検討していきます。

継続課題

京都市内における住宅庭の環境および その減少が街区の生物相に与える影響

京都大学　柴田昌三 教授　博士前期課程 新野彬子さん
（担当部署　環境管理課）

町家の庭の実測調査の様子

研究の概要

昨年度は、京都市内の緑地・水系・山麓という三つの領域を軸に、市民生活における自然環境との共生の知見を集め、身近な生物相の実態評価を行いました。その成果から、市街地において現在も比較的多くの町家が残存する地域では、町家を含む住宅の庭が緑の約４割を占めることがわかりました。

そこで今年度は、身近な緑地として「京町家の庭」に焦点を当て、現地調査（実測調査＋インタビュー調査）により、京町家の庭が生き物の生息地としてどのように機能しているかを考察します。

研究の進ちょく状況

私達の研究グループは約 20 軒の京町家に伺い、現地調査を行いました。調査で出会うお庭は一軒一軒似ているようでそれぞれ個性があり、新しいお庭と出会う度に胸が高鳴ります。改めて、古くから京のまちなかに息づく町家の庭の世界に深い感銘を受けています。

調査で訪れたT邸の奥庭（横大宮町）

また、本研究の一番の醍醐味は、町家に住む市民の方々から実際にお庭のお話をお聞きすることにあります。築 100 年近い町家に暮らすご主人は、「町家の庭は御苑と三山の緑を繋いでいた」「高い建物が出来てからあまり鳥が来なくなった」という話を当たり前のように口にされます。何十年も庭と寄り添って暮らしてきた市民の方々の言葉には、研究への新しい視点や気付きが溢れています。

研究に携わっているみなさん

柴田昌三教授の指導の下、リーダーの新野彬子(博士前期課程２年) を中心に日々研究を進めています。

後列左から４人目が新野さん、前列右から４人目が柴田教授

研究の抱負

２年間取り組んできた研究事業も残すところ1ヶ月半となりました。今後はこれまでの調査の蓄積をしっかりとまとめ上げ､「京都」らしいまちなかの生物多様性の保全に向けた具体的な施策の提言を目指していきたいと考えています。

自由課題

京都市における「フューチャーセンター」を活用した次世代型市民協働政策についての研究

京都府立大学 杉岡 秀紀 講師
（担当部署　市民協働政策推進室）

研究の概要

最近、京都市内でも「100 人委員会」や「〇〇カフェ」といった市民の方々の対話の場が増えてきました。その中で注目をされ始めているのが「フューチャーセンター」です。これは、組織を超えて、未来志向で対話をし、そこから生まれてきたアイデアを実際の形にしていく手法のことを指します。

本研究では、そのフューチャーセンターに着目し、全国各地の取組を調査し、京都市における次世代型市民協働政策について提言を行うものです。

研究者のプロフィール

大学時代からまちづくりに取り組み、2003 年にはＮＰＯも設立し、大学や行政、企業、自治会等の方々と対話を重ねながら地域に開かれた大学祭の創造や商店街活性化、産学連携ＩＴプロジェクト、商品開発等に取り組んできました。そこが私にとってのフューチャーセンターの原点なのかもしれません。

杉岡講師

研究の進ちょく状況

「フューチャーセンター」と一言でいっても、実施主体が行政、大学、NPO、企業と種類が様々です。そこで本研究では、まず、全国各地のフューチャーセンターの先進事例の洗い出し・現場調査を行い、現状や課題、連携のあり方について検討を行いました。その中で現在、構想しているのが「大学間フューチャーセンター@きょうと」です。

京都では、「大学のまち」の特徴を活かし、課題解決をテーマとしたプロジェクト（学まちコラボ、京都から発信する政策研究交流大会等）が実施はされていますが、いずれも大学（学生）が対象となる事業が多く、また、プロジェクトや大学の壁を越えての対話の場をもつことが難しく、市民も関わりにくい状況です。

研究協力者の地域公共人材開発機構 久保友美さん（奥）、
成美大学 滋野浩毅准教授（右）との研究会

そこで、大学の壁を超えて、一つの大学だけでなく複数の大学間で連携を図りながら「①地域側から定期的、気軽に課題を持ち込める場と機会を創る。②対話を通じ、簡単な地域課題はその場で解決できる場を創る。③長期的な課題や専門性を要する課題は、既存の事業に橋渡しをし、大学の資源を活かした地域課題の解決を可能にする」モデルの提案を議論しています。

また大学間フューチャーセンターの活動を担う人材育成講座の新設も提案したいと考えています。

編集後記

年度末が近づき、「未来の京都創造研究事業」の４年目も最終盤となりました。

今回は３テーマを紹介させていただきました。対象とする課題や取り組む方法はそれぞれですが、すべては京都の未来につながっています。

読者のみなさまはどのテーマに興味を惹かれましたか？ 引き続きご注目ください！

公益財団法人
大学コンソーシアム京都
シンクタンク事業担当 水田、矢野
E-mail　mirainokyoto@consortium.or.jp
電 話　075-708-5803
URL　http://www.consortium.or.jp/project/seisaku/think-tank